戦争と日本人

表題と写真は、副題が「あるカメラマンの記録」の復刻版・岩波写真文庫、2007 年。「はじめに」から―今日この本を世に送り出すに当って、私たちの希うことは人々にこれを冷静に見ていただきたいということである。維新以来 80 年の日本の歴史は、戦争から戦争へと歩ゆんだ跡だといっても過言ではあるまい。戦争がどのようなものであるかは、国民がみな知っている筈である。しかも、それが日々に忘れられてゆきつつあるということもまた否みがたいだろう。この本に収められた写真の大部分を撮影した影山正雄氏は、優れた報道写真家であり、戦時中には複雑な体験をした人である。その一家の記録は、戦争によって傷めつけられた人人の生活を代表しているものと考えてよいだろう。今それに、苦心蒐集した歴史的な写真を加えて、日本が歩いて来た姿を如実に描いて見た。掲載された写真の数は少いが、この背後にあるものを考えていただきたい。読者がこの本を静かに見て下さることを。

「2・26 事件」から始まる写真を見て、戦時中から戦後の父母のことなどを考えた。写真を紹介しにくいので、都留重人先生の「解説」を書き出しておこう。

「戦争は私たちの生活を苦しくした。これだけは疑う余地がない。学者は統計を示し、数字をあやつって、それを証明してはいるけれど、私たちもまだ生々しい記憶を保持している。当時の写真を今とり出してみると、私たちそれぞれの生活にうつしかえて、いろいろのことを想いださせてくれる。二度とあんな生活はしたくないと思う。戦争はやりたくないと思う。

しかし、考えてみれば、人間は艱苦に堪える力を、よくも持っているものなのだ。これでもか、これでもかと追いつめられながら、私たちは戦争中をなんとか生きてきた。しょせん勝てない戦争だということを一部の人たちは感づいていたらしいが、私たちの大部分は、勝てばなんとかなるだろうという期待をもたされて生きてきた。つまり、はりつめた気持で物資的な苦労を堪えしのんでいたのである。

じつは、その点が問題だ。

どのような物資的苦労であろうとも、それが崇高な目的のためであるならば、私たちは決してその苦労をいとわないのだし、またいとうべきでもない。だから、美食ができない、おしゃれができない、というだけの理由で戦争に反対する、というのでは十分ではない。それよりも、戦争は一部の人たちを一時的にもうけさせはするけれど、すべて

の貴いもの、美しいものを破壊するのにたいし、何ものをも成就しないという点こそ、私たちははっきりとつかんでおきたい。特に現代の戦争は、勝つもの負けるものの区別なく、おそろしい破壊力だけをふりまわす。私たちの生活を楽にするような政策が、戦争の危険を増すようなものであるならば、たとえ生活は苦しくなっても、私たちは平和を約束する途をえらびたい。

写真を 2 枚だけ紹介したい。上は最初のページである。最後のほうに出てくるが、三男の賀彦さんが昭和 26 年に 5 歳で亡くなった時だ。死亡診断書に「心臓衰弱症」と書かれていた。終戦後の混乱期には、こうした病死も多かったであろう。昭和 23 年生まれの私も病弱で、かなり危なかったという。

下は最後のページの写真だ。こう書かれている。「横浜の米軍ベースに行った。鉄條鋼のそばで混血児が花を売っていた。女の着物を着た男の子だった。こうしないと花が売れないよというその年恰好は、死んだ賀彦と同じくらいだった。」

（2016 年 6 月 8 日）